

第42回 TKC関東信越会 さいたま秋期大学 「創ろう未来! 彩の国より~集い 学ぼう 川口で~」

2016.9.13 (火)~14 (水)

「創ろう未来! 彩の国より~集い 学ぼう 川口で~」のテーマのもと「さいたま秋期大学」が「川口総合文化センターリリア」に於いて盛大に開催された。多数のご来賓を迎え、TKC会員・職員・提携関連企業を含め総勢700余名の参加があった。

開校式は富澤雅治・佐山直子両会員の司会により、国歌斉唱後、栗林豊大会会長、米田和弘実行委員長長の挨拶、来賓として新藤義孝衆議院議員、枝野幸男衆議院議員、宗友輝夫日本政策金融公庫国民生活事業北関東地区統轄からそれぞれ祝辞をいただいた。

引き続き行われた第19回奥山賞の授賞式では昨年9月TKC全国会社会福祉法人経営研究会代表幹



栗林 豊
大会会長



米田 和弘
実行委員長

事の職を退任された川井義久会員と同じくTKC全国会7000プロジェクトの活動で優秀な成績をあげた長野支部のプロジェクトメンバー（西山秀一会員、横山実会員、伊坪眞会員、松崎堅太郎会員）のみなさんが栄えある受賞となった。

開校式終了後、元プロ野球選手桑田真澄氏による、「試練は人を磨く」というテーマによる基調講演が行われ、この後、石坂産業㈱代表取締役社長石坂典子氏と㈱メンタリスタ代表取締役大儀見浩介氏による二つの分科会が催された。

分科会後、レセプションが盛大に行われた。翌日はゴルフ大会が狭山ゴルフ・クラブで開催された。

基調講演

「試練は人を磨く」

元プロ野球選手 桑田 真澄



高校野球のPL学園で、1年からエースとして活躍され、甲子園5季連続出場（優勝2回、準優勝2回）、甲子園通算20勝（戦後歴代1位）。卒業後はドラフト1位で巨人軍に入団し、沢村賞、最優秀選手、ベストナイン、最優秀防御率、最多奪三振などの数々のタイトルを獲得された。講演では2度の挫折を味わいながら、それを試練として乗り越え、自らを磨いてきた経験を語られた。内容は以下の通り。

1. 野球のすばらしさと人生哲学

野球はすばらしいスポーツであるが、結果がすべての厳しい世界である。弱肉強食の世界で、結果を出し続けることは難しい。

野球には攻撃と守備があり、攻撃に優れ、いくら点を取っても、守備が疎かであれば、それ以上に点を取られて敗北する。逆に守備に優れ、0点に抑えても、攻撃で点を取れなければ勝てない。つまりバランスが重要で、表と裏の両立が出来なければ勝ち続けることは難しい。それが人生哲学となった。

2. 2度の挫折

1回目の挫折は小学生の頃で、その実力は既に低学年で認められていたが、完全な縦社会の中、ひ

どく上級生にしごかれ、一度野球を辞める。しかし母から目標を立てることを勧められ、その目標を達成するにはどうすれば良いのかを考えるようになる。小さな成功に自信をつけ、野球でも勉強でも努力することの楽しさを知る。少しずつコツコツと、短時間集中型の努力を覚え、中学野球では敵なしのレベルになった。

2回目の挫折は、目標の1つであったPL学園に入学した頃で、厳しい縦社会の寮生活に苦しんだ。また数多くの実力者が集まる高校で、自分の力は通用しないと感じてしまう。しかし、絶対にあきらめるなという母の助言から、なかなか結果が出ない常識とされていた練習方法を見直した。常識を疑い、自分らしさを見出すことにし、総合力を高める考える野球を確立し、チームメイトとともに記録に残る結果を出すことができた。

3. メジャーへの挑戦と今後

米メジャーリーグへの挑戦理由は、本物を実際に自分の目で見て触れてみたかったから。そこには想像だけでは絶対に得られない感動があった。今後もいろいろな事に挑戦しつつ、世界一である日本プロ野球に貢献したい。

結果がすべての世界で生きながら、達成できたかどうかは大事ではなく、そのプロセスが大事であるという言葉で講演を締めくくった。

第1分科会

「絶体絶命でも世界一愛される会社に変える」

石坂産業株式会社 代表取締役社長 石坂典子



埼玉県所沢市の農作物がダイオキシンで汚染されているとの報道がされた2002年、その汚染の原因が石坂産業にあると叩かれた。絶体絶命の局面から脱出し世界から注目される企業に変革を遂げた社長の苦悩と斬新な発想について講演された。

1. ダイオキシン報道

「あの辺りの子とは遊んじゃダメ！」と陰口を言われ、幼心に父の営む産廃の仕事が好きになれなかったが、ある日、廃棄物の分別をしている社員の働く姿を見た時、この人達がいるからゴミの処理ができるのだと思うようになった。2002年にマスコミ報道で所沢のダイオキシン騒動が勃発し、いったいどこがダイオキシンを出しているの？と話題になった時、石坂産業の煙突が一番高いという理由で犯人扱いされ、地元の人約3,000名の署名と共に「石坂は出て行け！」と批判的になった。そんな絶体絶命の状況から何とか会社を変えたいと思い、30歳の時、自分に社長をやらせて欲しいと父に頼み、1年間の条件付きで社長を任されることになった。

2. 脱産廃屋

地域から疎まれることなく100年継続できる企業を目指そうと決心。「地域に受け入れられない仕事を続けてもうまくいかない」として、まず煙突を撤去し焼却事業を廃止した。屋外だった処理工場を屋内型に変え、周囲に与えるイメージを一新し、建設廃材の処分場として生まれ変わりをかけて、約40億円の設備投資をする。工場見学通路を整備し、お客様や地域の人達、同業者にも見学に来て貰い、「ゴミを出す時のコスト」を考えてもらう工夫をした。さらに、国際規格ISOを取得し、社員教育に力を入れ、整理・整頓・清掃を徹底した。最初は社員からの反発もあったが、徐々に成果が現れ見学に来てくれた多くの人から評価されるようになると社員の仕事ぶりも変わった。現在では海外からも見学者が訪れる程になっている。

3. 環境産業としての取り組み

四方が森や畑に囲まれた地で事業を営む企業の使命として、環境保全に取り組み環境との共存にも力を注いでいる。里山保全のために「三富(さんとめ)今昔村」を作り、動物の住みやすさや、みどりの地域らしさを評価するハビタット認証制度の「AAA」を取得した。これらの取り組みにより地域になくはならない会社になりつつある。講演の最後に、「諦めなければ世界は広がる」「マイナスの分だけプラスにできる」と締めくくった。

第2分科会

「やる気を高める目標設定」

メンタルトレーニングコーチ 株式会社メンタリスト 代表取締役 大儀見 浩 介



大儀見氏は、スポーツ・教育・健康・ビジネスなどの現場でメンタルトレーニング等をテーマに年間250本の講演活動を行っている。氏は「心はトレーニングによって誰でも強くしていく事が出来る」と語り、次のような講演を行った。

メンタルトレーニングは、当初宇宙飛行士の心理面強化に用いられ、日本では1985年に導入された。心理学という学術的な背景を持ち、研究の結果効果があると実証された合理的・科学的・系統的な「心のトレーニング」である。

人は、「集中しろ!」「プラスに考えろ!」「根性を出せ!」「やる気を出せ!」と言われたとき何をするのか? 「集中しろ」と言われてどのように集中すればいいのか? 「やる気を出せ」と言われるやる気とは何か? 仕事の前、作業の前によく言われる言葉であるにも拘らず「やる気」や「集中」とは何か分からない。「集中」とは何かを知る事が出来れば集中することができる。これがメンタルトレーニングだという。

今回は特に目標設定に焦点を当てた講演が行われた。具体例として、頭に思い描いたミッキーマウ

スやオリンピックのマークを実際に紙に描こうとすると難しい。夢のイメージを言葉にしようとすると難しい。

しかし、イメージと現実のギャップは埋められる。アスリートやビジネスパーソンの目標設定のテクニックとしてプロセス目標を設定することを挙げる。一流の人はプロセス目標を自分で設定する。なぜ、プロセス目標を自分で設定しなければいけないのか。プロセス目標を設定したときの行けそうさ感、出来そうさ感がやる気だと語る。ゆえに理想的なやる気は自分でしか作れない。やる気とは動機づけである。

これに対して外発的動機づけの場合、やらされている感があり、つまらなく、結果を求められ、評価・比較・優劣が気になり、結果としてバーンアウトにつながる。

ただし、デシ&ライアの「自己決定理論」にもふれ、外発的動機づけから内在化が始まっていくとも述べた。

小さな自己決定が成功のカギとしながら、チクセントミハイのフロー理論により、最適な目標水準は限界プラス10%とし、達成目標理論を紹介した。

最後は時間に押されたことから、詳しくは『勝つ人のメンタル』(日本経済新聞社)をご購入くださると述べ講演を終えた。